



TITLE:

洛陽城との比較に見る恭仁京

AUTHOR(S):

早川, 尚志

CITATION:

早川, 尚志. 洛陽城との比較に見る恭仁京. 地域と環境 2014, 13: 91-108

ISSUE DATE:

2014-12-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/197664>

RIGHT:

洛陽城との比較に見る恭仁京

Kunikyō, in comparison with Luoyang

早川尚志

Hisashi HAYAKAWA

日本の都城プランが中国の長安を模倣したものであるのに対し、恭仁京のプランは都を貫く大河、内在する港、偏在する内裏と「朱雀大路」、左右京に山地が介在する狭隘な甕原の選地、と例外だらけであったが、その原因は長らく究明されてこなかった。そこで筆者は恭仁京を隋唐のもう一つの都洛陽と比較検討することで、その例外性の原因に迫り、恭仁京が他の日本の都城と違って洛陽を模倣して成立したものである可能性が浮上した。

キーワード：恭仁京，洛陽，都城制，冊封体制

Key words : Kunikyō, Luoyang, China-originated City Plan, Tributary System

1 序論

聖武天皇は740年、平城京から東国行幸に出て、そのまま恭仁京に遷都した。結局、帝はこの都に落ち着くことはなく、3年ほどこの地に留まった後、難波、紫香楽と、745年に平城京に戻るまで転々と遷都を繰り返した。この恭仁京のプランは長安から影響を受けていた日本の他都城のプランに対し、(1) 都を貫く大河、(2) 内在する港、(3) 偏在する内裏と「朱雀大路」、(4) 左右京に山地が介在する狭隘な甕原の選地、と例外が多い（岩井 2012: 48-50, 56）。

では何故このような変則的な都城が造られたのか。そもそも都城とは中国の影響を受けつつ、その周辺国で成立・展開したものであった（橋本 2011: vii-viii）。日本の一般的な都城のプランについても隋唐の長安城からの影響が指摘されている（応地 2011: 429）。これに対し、恭仁京の変則的都城プランについても、古来同時代の唐の陪都洛陽城との類似が指摘されている（喜田 1939: 305, 313）。しかし後述するように、従来恭仁京の研究は畿内における都城研究が主で、洛陽からの影響について指摘しつつも、一次史料に即した比較検討は行われてこなかった。

そこで本稿では洛陽城と恭仁京の都市機能やプランについて比較し、日中双方の史料や知見を精査することで、恭仁京の都城プランへの隋唐洛陽城からの影響を検討する。

2 学史

恭仁京の研究は他の日本の都城研究と同じく古くは喜田（1939）に遡る。喜田は恭仁京への

遷都理由を広嗣の乱からの避難、橘諸兄の勢力圏相楽郡への新規都誘致等の政治的要因に求める一方で、その例外的な都城プランについては深く立ち入らないものの、洛陽からの影響を指摘している。瀧川（1967）は恭仁京への遷都理由についての喜田の説に対し、恭仁京と洛陽城の特に大河が貫流している景観について類似を指摘し、恭仁京は洛陽城を支配する天漢崇拝を受容し、模倣したものとして、陰陽道の視座の必要性を訴えている。瀧浪（1991）は恭仁京について、紫香楽大仏建立の一時拠点に過ぎないとし、その選地理由には、建立に際し水運拠点の泉津を利用しようとしたことを挙げている。

恭仁京の都城プランについては足利の一連の著作（足利 1969; 1970; 1973; 1980; 1985）で歴史地理学の視座から検討され、その再現図が発表された後、近年岩井（2012）によって、恭仁京が都城の理念に沿って造営された都たることが証され、そのプランが実証的に示された。

泉津の研究は近年中島（2007）、岩井（2010）が発表され、その水運機能について実証的に示され、この港が平城京時代以前から大和盆地各地の外港としての役目を果たし、恭仁京に至ってついにその水運機能を都城内に取り込もうとしたことが明かされた。

恭仁京遷都に至るまでの歴史について考察したものには鎌田（2008）がある。鎌田は恭仁京遷都以前から近郊の甕原離宮へしばしば行幸があったことを指摘し、735年に唐から帰国した吉備真備、玄昉が朝廷でその新知識故に重用され、恭仁京遷都を主導した橘諸兄政権下で首脳として活躍したことを指摘している。なお、甕原離宮の位置については中谷（1987）に詳しい。

洛陽との類似、その影響を指摘したものには加茂町史編纂委員会（1988）、木津町史編纂委員会（1991）、伊野（2011b）があるが、いずれも保留付の指摘で踏み込んだ検討は行っていない。恭仁京と洛陽の類似を踏み込んで扱った専論には小笠原（2011）がある。小笠原は主に複都制の観点から恭仁京・紫香楽宮を洛陽・龍門に擬えて論じている。但し当該論文はその検討に際し、洛陽側のデータを全面的に愛宕による徐松『唐兩京城坊攷』の訳書（徐松 1994）に依存し、正史や他の漢文史料、また日中双方の東洋史・考古学の知見の参照に欠けている。

隋唐洛陽城の研究について、ここでは簡潔にまとめるにとどめる。

史料としては、正史には『隋書』『旧唐書』『新唐書』がある。洛陽城そのものを扱ったものには、宋敏求の逸書『河南志』を徐松が再録した『元河南志』、唐韋述の『兩京新記』等があり、いずれも（平岡 1977）に原文が索引・地図と共に収録されている。また、原史料に準じる文献には先述した清代の考証学者たる徐松の『唐兩京城坊攷』があり、これも原文が平岡（1977）に収録されている。なお、愛宕による訳書（徐松 1994）が東洋文庫から出版されている。

洛陽についての研究は長安と比して史料の制約の故にあまり進んでいない。中国の知見を深く取り入れた専論には妹尾（1997）があり、洛陽城は唐の京師長安城に対し、（1）城内の中央を洛水が通り抜け、洛水に繋がる水渠が城内縦横に交差する点、（2）西北部に宮城・皇城が偏在する点、（3）宮城の防禦機能の優越、（4）全体の規模が長安城の半分に過ぎない点、（5）方

位のずれ、(6) 市の数、等の問題点を持っている（妹尾 1997: 78）と指摘している。外郭城と里坊制の観点から中国各時代の都城を検討したものには積山（2001）がある。

一方、地理学的な見地からの検討も近年進んでいる。小方（2010）は CORONA 衛星の衛星写真によるリモートセンシングの観点から隋唐洛陽城を俯瞰し、塩沢（2010）は筆者自身の綿密な現地踏査に基づいて各時代の洛陽城について検討を加えており、価値が高い。

中文で隋唐の長安・洛陽を包括的に扱ったものには辛（1993）、程（1993）の他各種考古学成果を取り入れたものがあるが、紙面の都合上こちらは必要に応じて触れることとする。

3 遷都に至る歴史

8 世紀、東アジアは唐の冊封体制下にあった。唐は複都制を採っており、首都たる京師長安の他に陪都を東都洛陽と唐の始祖李淵挙兵の地太原に置いていた。条坊制・複都制と言った唐の都城システムは新羅（王 1998: 16-8）、渤海（小方 2000: 33）、突厥の故地碎葉城（沈 1985: 128）を始め東アジア全土で模倣された。無論日本もこの例に漏れない。天武天皇は 683 年 12 月 7 日の詔で「凡都城・宮室非一处。必造兩參。故先欲都難波」（日本書紀 683-12-17）とし、日本でも複都制を採ることを企図している。難波京・平城京の造営に際しても唐の長安のプランを模したことが指摘されており、都城造営への遣唐使の影響も指摘されている（応地 2011: 429）。

時代は遡り隋代から、日本は先進の中原の文化を学ぼうと、幾度も遣隋使・遣唐使を派遣し、その知見を重用していた。日本の都城設計もその例外ではない。古く「大化の改新」の際、中大兄皇子が後の協力者中臣鎌足に出会ったのは「自学周孔之教於南淵先生所」（日本書紀 644-1-1）の折であった。ここで言う周孔之教とは儒教のことであり、南淵先生とは、608 年隋より訪朝した裴世清を隋に送還する送隋客使の一員として隋に渡り¹⁾、640 年に帰朝した²⁾、当時の中国の最新知見を伝える学問僧南淵清安のことを指す。このことから当時造営された飛鳥浄御原宮の様式に「三朝制度」が見られるのを清安等の中国留学経験者が伝えたとする指摘もある（応地 2011: 393）。

飛鳥の次に都が置かれたのは藤原京であった。この都のプランは『周礼』『考工記』の理念を忠実に踏襲した中央宮闕型の都城である。その理由として、669 年から 702 年に至るまで遣唐使派遣が中断しており（王 1998: 26）、670 年代の造営開始時期から 694 年の遷都に至るまでの間、同時代の隋唐の都城、特に隋唐長安城についての知見が欠落していたことから、『周礼』の記述を参考に藤原京造営を進めたとする指摘がなされている（中村 1996: 96-7）。

続く平城京については前述の如く、唐都・長安の翻案とする指摘がなされており、遣唐使粟田真人の役割が強調されている（応地 2011: 429）。真人は 701 年、33 年ぶりの遣唐使の遣唐執節使³⁾に任命され、唐に派遣された。702 年に長安で則天武后の謁見を賜り、2 年唐土に滞在した後帰朝し、704 年に藤原京の文武天皇の許に帰朝報告を行い⁴⁾、翌年には従三位・中納言に

昇進している。

707年には「詔諸王臣五位已上。議遷都事也」（続日本紀 707-2-19）と平城京遷都の討議が始まり、その中心メンバーとなり、遷都を主導した大納言藤原不比等の方針に従って遷都を推進していったことが指摘されている（応地 2011: 430）。

恭仁京に関するものでは、まず元正天皇が716年に多治比県守を大使とする使節団を派遣している⁵⁾。この遣唐使には阿倍仲麻呂、吉備真備、玄昉も参加し、特に仲麻呂・真備については「我朝学生播名唐国者。唯大臣（真備）及朝衡二人而已」（続日本紀 775-10-2）と高く評価されている。唐滞在中の彼ら留学生の足跡については、仲麻呂以外唐側の史料には現れない。18年経ち、聖武天皇の御世、734年に次の遣唐使が多治比広成を大使にやって来た。真備と玄昉は彼の船に便乗して帰朝する。帰国後真備たちは朝廷に唐将来の品々を献上し、その一つが「測影鉄尺一枚」（続日本紀 735-4-26）。これは長さ8尺（2.4m）（大谷 2003: 175）、古代中国では都を定める際に用いられた（伊野 2011b: 15）。表1のように、聖武天皇の行幸が真備らの帰朝の直後から活発化している。特に後の恭仁京の近くの甕原離宮への行幸は即位後4回あるが、内3回は遣唐使帰朝後の736～9年に続けて行われている。このことを合わせて考えると、この鉄尺の献上は意味深い。

唐の新知識を持ち帰った真備は玄昉と並び、朝廷に重んじられ、橘諸兄首班下でも枢要を占める。738年の七夕の詩譜においては「勅右衛士督下道朝臣真備及諸才子曰」（続日本紀 738-7-7）とあるように真備のみ名が挙げられており、彼が聖武朝下で側近としての地歩を固めていた

表1：聖武天皇の行幸と行先

年	行幸先			凡例	
724	吉野	和泉	紀伊	吉野	吉野離宮
725	難波			難波	難波宮
726	難波	播磨		甕原	甕原離宮
727	甕原			和泉	和泉国
728				紀伊	紀伊国
729				播磨	播磨国
730				相良	相良別業
731					
732					
733					
734	難波	和泉			
735					
736	甕原	吉野			
737					
738					
739	甕原	甕原			
740	難波	相良			

ことが覗える（森本 2010: 204）。737 年には真備は従五位上、玄昉は僧正に昇進している（続日本紀 737-12-27）。聖武天皇の唐の新知見への傾倒ぶりが覗える。

真備の急な昇進を妬んで挙兵した藤原博嗣の叛乱を制圧すると、聖武天皇はこれで目途がついたと見たのか（瀧浪 1991: 40; 森本 2010: 227-8）、19 日に東国行幸を決意し、26 日に平城京を出発。この間の 23 日に広嗣は捕えられ、25 日に処刑されている。聖武天皇は 11 月 3 日この報を伊勢の河口頓宮で受けた。彼はそのまま道中木津川の畔甕原で歩みを止め、恭仁京を都に定めた⁶⁾。

吉備真備は多治比広成の船に乗って帰国する際、唐より新都決定に用いられた鉄尺を持ち帰り、聖武天皇に献上している。聖武天皇も広成を唐に派遣してから、数年来遠ざかっていた行幸を再開し、特に後の恭仁京の近郊甕原離宮へは真備帰国後から 5 年間に 3 回と続け様に行幸を繰り返している。真備も聖武天皇の許で急速に地歩を固め、橘諸兄を首班とする政権の中の枢要としての地位を確立している。5 年の内に一躍地方豪族の子弟から貴族の席に上り詰めている。以上、唐より帰朝した真備・玄昉の急な重用と前後する聖武天皇の頻繁な行幸に続いて恭仁京遷都が行われ、そのことが表 2 に見えるように当初の立場こそ違い、上述した平城京遷都に至る粟田真人の役割と並行関係をなしていることを鑑みるに、聖武天皇の遷都には真備等の遣唐使が持ち帰った唐の知見が影響している可能性は高いといえよう。この際聖武天皇が特に求めた知見は後述のように、洛陽や長安を中心とした都城プランであったと思われる。以下、実際に恭仁京とそれが模したと思われる洛陽城の機能を比較し、この点について検討していく。

4 洛陽・恭仁京の機能比較

1) 都を貫く大河

隋唐期の洛陽城のプランは「北據邙山，南對伊闕，洛水貫都，有河漢之象」（旧唐書 38: 1420-1）という前例のないものであった（積山 2001: 14）。理由は二つ挙げられる。

一方は『旧唐書』に明記されているように河漢（銀河）の象徴となるとという象徴解釈の面である。帝都とは天の縮図であり、天空を銀河が貫くように都を貫く河があるべきだとする考え

（表 2：真人と真備 続日本紀より作成）

	粟田真人	吉備真備
遷都先	平城京	恭仁京
参考にした都城	長安城	洛陽城
遣唐使出発	701 年 1 月 23 日	716 年 8 月 12 日
帰朝報告	704 年 10 月 9 日	735 年 4 月 26 日
遣唐使での地位	遣唐執節使	留学生
派遣以前の地位	民部尚書直大式	従八位下
帰朝後の地位	従三位中納言	従五位下
遷都時の首班	藤原不比等	橘諸兄

によるものである(瀧川 1967:339)。徐松はこの思想の起源を秦の咸陽に求め、『三輔黄図』の「咸陽故城…以則紫宮。象帝居。以象天漢。横橋南渡。以法牽牛」という記述を引いている(唐西京条坊考 5.12)。隋唐洛陽城の場合、洛水が銀河を、宮城が帝居即ち北極星を囲む星座を象徴している(妹尾 1997:79)

他方は水運、財政経済、軍事防禦といった面である。大運河開鑿と洛陽場建設がいずれも隋の煬帝の治世であることから、当初からこの都は華北水運網の経済・軍事の要と位置付けられていたことが分かる(妹尾 1997:78)。水運面については次節で詳述する。

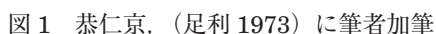
また、洛陽に架かっていた橋は史料からは四つ確認できる。上流から順に①天津橋、②元中橋、③中橋、④利涉橋である。各々の橋については宋敏急の逸書『元河南志』が詳しい。①天津橋は宮城から南へ延びる定鼎門街の橋であり⁷⁾、洛水はこの橋の直前で三つに分流し、南から順に星津橋、天津橋、黃道橋と称されていた⁸⁾。洛水を銀河に擬える先の象徴解釈説を裏付ける名である。②旧中橋は隋の大業元年に造られた木橋であったが、後に洪水で流失して③中橋に架け替えられている⁹⁾。③中橋は洪水で流失した②旧中橋に代わり、675年に長夏門街に木造の橋として架け直され、則天武后治下で石脚橋とされている¹⁰⁾。④利涉橋は隋代に浮橋として作られるも隋唐合戦で破壊流失し、唐代に再び浮橋として再建されている¹¹⁾。以上から同時に併存したのは3つであり、本論で論じている真備留学時代には①③④の三つの橋が併存していたことが分かる。

一方、恭仁京においても都を貫流する木津川は他都城には類を見ない存在であった。日本の他の都城では近郊に大河が流れるもの(難波京、長岡京)や市内を小川が流れるもの(藤原京、平城京、紫香樂京、平安京)はあるが実際に市中を大河が貫くものは恭仁京のみである。

木津川は後述するように淀川を通して大阪湾につながり、古代においては泉津を擁する水運の大動脈であった。古代においてはかなりの大河だったようで、『万葉集』(13.3240, 3315)にもその渡渉についての歌¹²⁾がみられる。また、恭仁京以前には橋の記述は見当たらず、木津川に橋が架かったのは恭仁京に都が置かれてからだったようである(木津町史編纂委員会 1991:194-5)。

なお、新都の置かれた甕原は四囲を山で囲まれ、木津川が貫流する地であり(加茂町史編纂委員会 1988:160)、こと甕原離宮からは遠方の山並みと眼下の河の淀みが組み合わさり、万葉集にも幾多詠まれる名勝を織りなしていたことも指摘されている(加茂町史編纂委員会 1988:180)。

恭仁京域で木津川に架かる橋は地図1から明らかなように三つあった(中島 2007:266-70)。最も上流の橋①については「賀世山東河造橋」(続日本紀 741-10-16)との記述が見える。朱雀大路と木津川の交点にあった橋に比定される。橋②については「宮城以南大路西頭。与甕原宮以東之間」(続日本紀 742-8-13)とある。東岸に「橋の本」という小字が残っている(京都府教



都を貫く河は洛陽では洛水であり、恭仁京では木津川であった。前者は北の邛山、南の伊闕という山々の間を流れ、後者は北の伯山、南の鹿背山の間を流れる。南北の山の間に都があり、そこを大河が貫くという図式が共通しているのである。さらにいずれも宮城が北に置かれており、天空を貫く天漢、北に君臨する帝居という図式が読み取れる。恭仁京への天漢思想の影響について文献には見えないとはいえ、この図式上の一致をみると、改めて（瀧川 1967）の言うように陰陽道の角度から再検討を加えてみることは決して無益ではないと思われる。

— 97 —

図版 二六

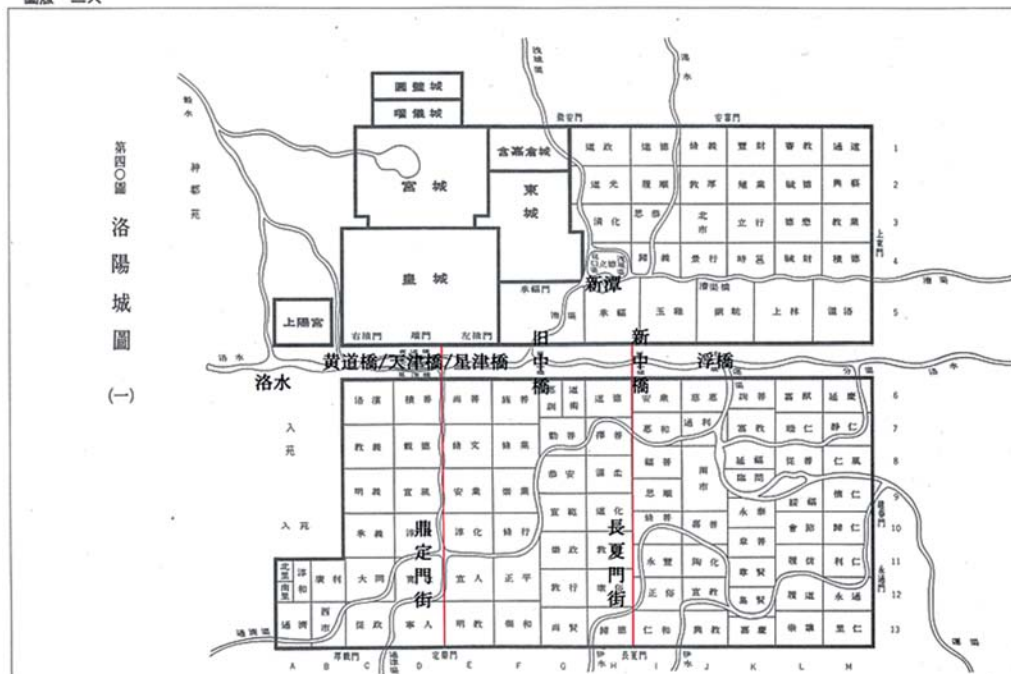


図2 唐代洛陽城, (平岡 1977) に筆者加筆

いずれも三つである。更に各々最上流の橋は朱雀大路ないしそれに相当する定鼎門街を宮城から南へ直通させる橋、最下流にあるのは浮橋（船をつなげて造った橋）と三つの内少なくとも二つにおいて性格が一致することである。このように橋を上流から下流に並べるとその性格が一致することから、聖武天皇が洛陽に模して恭仁京を造った場合、方位ではなく川の上流下流の対応を重んじたととることができる。この対応は恭仁京の内裏の立地にも反映されている。その理由については4.3)にて検討する。

2) 内在する港

洛陽が恭仁京にどのような影響を与えたかについては保留するとしても、一つ衆目に明らかなのは両者を貫く洛水・木津川の持つ水運機能を何れもその都の内に取り込んでいることである（妹尾 1997: 78; 岩井 2012: 40）。

隋唐期に洛陽が陪都となった理由は主に二つある。第一はその地理的な重要性である。洛陽は黄河中流の渡し場孟津を北 10km に控え、内中国の中心と目された都市であった（妹尾 1997: 70-4）。歴代王朝の首都の変遷を見る限り、この認識は歴史上殷代から唐代まで続いている。第二は水運の条件である。当初、隋唐帝国の京師が置かれたのは渭水の畔長安であった。しかし長安は水運に難があった。隋唐期には穀倉の江南地方から中央に租米を吸い上げる必要があっ

たにもかかわらず、中原から長安に水路で向かう際、途中に三門砥柱の險（現三門峽ダム付近）という水運がほぼ不可能な難所を通らねばならず、そこでは水運から陸運に切り替えざるを得ない。その際注目されたのが古来長安と共に幾度も首都の置かれてきた洛陽である。洛陽は三門峽より下流にあったため、黄河から洛水を遡上すれば容易に到達可能であった。そのため長安まで輸送しきれない諸物資を貯蔵する一大基地という性格が与えられた（徐松 1994: 184）。先述のように洛陽城造営が隋代の大運河建設と同時期に行われたことから、洛陽が水運を意識して造られたことは明らかである（妹尾 1997: 97）。

この際洛陽の水運の中心になったのが新潭である。則天武后治下の長安年間開鑿された舟溜りで全国から租米運搬船が集まった。洛水から新潭へは漕渠を経由する。開発から放棄に至る経緯は「東北流至立德坊之南西溢为新潭。長安中司農卿宗晋卿開以通諸州租船。四面植柳。中有租場。積石其下于。上布土潭立石柱。馬吉甫為其文鐘紹京書。後潭中水浅租船不能至」（元河南志 4.16a）という。その賑わいぶりは「自此橋（通濟橋）之東皆天下之舟船所集。常万余艘填滿河路。商旅貿易車馬填塞。若西京之崇仁坊」（元河南志 4.16b）とされるほどである。

新潭から洩城渠を北西に進むと含嘉倉城に至る。この倉庫群については文献では言及されていないものの、1971年の発掘以来その全貌が明かされ、洛陽最大の穀物貯蔵庫だったことが判明した。規模の詳細は徐松（1994）の注釈に譲るが、推計によると最大400万石の穀物を貯蔵できたという。これは47万人の年間穀物消費量に相当する（徐松 1994: 202-4）。このみならず、洛水の南側にも伊水の畔に水南倉があるなど、洛陽各地に倉庫群が建ち、洛水と各種運河で緊密に水運と結び付けられていたことが分かる。

なおこの街には当初南北西の「三市」（元河南志 1.2a）があったが、ちょうど真備留学中の725年「廢都西市」（旧唐書 8:188）。結果「二市」（旧唐書 38:1421）になっている。地図からは北市も南市も各々瀍水、運渠で洛水に接続していることが分かる。

一方の恭仁京も右京域に泉津を組み入れ、その機能を十二分に発揮させ得る最高の立地条件の都（岩井 2012: 49）であったという。泉津の範囲はなお詳細不明だが、木津川南岸の上津、中津、下津に比定する説が有力である（中島 2007: 268; 岩井 2010: 1）。

恭仁京遷都以前の古代大和周辺の水運という点、大和川水系と淀川・木津川水系が思い浮かぶ。しかしその実、大和川水系では亀ヶ瀬で一旦物資を陸揚げせざるを得ず、大和川自体水量が少ないという問題があった。それ故当時の水運は専ら他方の淀川・木津川水系に集中し、殊大和盆地への水運は泉津が全面的に担っていたようである（岩井 2010: 1-2）。実際、藤原京・平城京の造営に際しても近江田上山等から切り出した檜材を利用しており、瀬田・宇治川→木津川→泉津→大和盆地というルートで運ばれたことが想定されている。このため、泉津には遷都以前から諸司・諸大寺が軒を並べて拠点を構えており、恭仁京への遷都はこの経済流通の拠点を手に入れようとした側面があるとの指摘（中島 2007: 266-8）もなされている。そのため泉津は

平城京の東西市同様或いはそれ以上に重要であったとする指摘（小笠原 2011: 175）さえある。

泉州と難波の水運については文献にも見え、後に恭仁京から難波京へ遷都する際、「運恭仁宮高御座并大楯於難波宮。又遣使取水路運漕兵庫器仗」（続日本紀 744-2-20）と水路が取られており、木津川・淀川という水運を通して泉州から難波まで繋がっていたことが分かる。

恭仁京の市については「遷平城二市於恭仁京」（続日本紀 741-8-28）とあることから二つあったことが分かる。実際に遷都について住民に諮る際も「遣從三位巨勢朝臣奈弓麻呂。從四位上藤原朝臣仲麻呂。就市問定京之事」（続日本紀 744-1-4）と二市で意見を募っている。二市の位置については東市が赤田川畔の高田集落付近の図の p 地点、西市が井関川畔の作り道、奈良道の合流地点の図の q 地点に比定されている（足利 1973: 41, 45）。特に東市跡に比定されている高田集落近郊では 1937 年 3 月に多量の和同開珎が出土している点もこの比定を裏付けるものとして指摘されている（加茂町史編纂委員会 1988: 171-2）。既に平城京の東西市が各々佐保川を水源とする東堀川、秋篠川に当たる西堀川と結ばれ、両運河を輸送水路・排水路として用いていたという先例があり（応地 2011: 442）、泉州・平城京間の輸送に木津川南岸の井関川、反田川、鹿川、山田川が水運として用いられていた（岩井 2010: 13）との指摘もあるため、両市が各々赤田川、井関川沿いに立地しているという事実は木津川の支流が市内水運網として用いられていた可能性を示唆する。

水運については洛陽も恭仁京も各々黄河・洛水水系、淀川・木津川水系という水運の大動脈を都に取り込んでいる。しかしその港については洛陽では新潭という港を新しく開鑿したのに対し、恭仁京では泉州という既存の港を取り込むことで従来の水運拠点を手に入れている。いずれの場合も市内での物資輸送は洛陽では渠、恭仁京では川の支流という水運を用いていた点が指摘できる。市についても一見洛陽三市と恭仁京二市と数に齟齬が生じそうだが、洛陽について聖武天皇に報告したのが真備たちだとすると、彼等は滞在中に西市が閉鎖されたのを現地で知っていると考えるのが自然であり、洛陽の市は従来通り二市と報告したものと思われる。

3) 偏在する内裏と「朱雀大路」

洛陽では旧唐書によると宮城は都の北西隅にあった¹⁴⁾という。その造営軸線は内城では中軸線を通るが、外城では都城全体の西端近くを通っている。長安や平城京を代表とするこの時代主流の都城プランで、造営軸線が内城・外城の中央を貫いていることに対し、非常に変則的なデザインであると言わざるを得ない（積山 2001: 15）。

宮城の立地理由については、防禦・洪水回避の観点から高台を選んで造ったためであるという。それが都城の北西隅に位置していることについては、計画当初から決定されていたとする説と工事開始後計画が変更された結果とする説と二通りの説がある（妹尾 1997: 79-80）。

前者を主張するのは宿白（1990）で、唐の諸城址との比較の上で、洛陽城は元々西高東低の

華北の地形に則って天徳を有する乾（北西）の方角に置かれたものであると述べている。

後者を主張するのは岡崎敬（1963）等で、洛陽は元来北闕型の左右対称計画都市であったが、工事開始後に外城西部が澗水・洛水合流地点の氾濫原に至り、居住困難と判明し、外城については東部への拡張を軸にしたとする説である。この際特に隋の煬帝が邙山に登って伊闕を望み、洛陽城を築く位置を選んだ¹⁵⁾とする故事を根拠としている（妹尾 1997: 79-80）。

両者ともに各々根拠はあるが、管見では後者について、旧西市や通済坊のように一部南西にはみ出した坊が見られ、『旧唐書』地理志にも洛陽の立地について「北據邙山，南對伊闕」（旧唐書 38:1420）と明記されていることから後者の方がやや有力かと思われる。

宮城の南に直通する大通りは定鼎門街と呼ばれ¹⁶⁾、幅 100 歩（147m）と洛陽最大の大通りで、長安城の朱雀大路に相当し、先述のように洛陽城本来の中心線となるべき大通りであった（徐松 1994:216）。しかしこの際長安城の朱雀大路と決定的に違う点は、長安城では朱雀大路が「万年・長安二県以此街為界」（徐松 2.2a）と二県の境界線になっており、「右街」「左街」という表現が見られる（旧唐書 18 上 :605）のに対し、洛陽城では河南・洛陽二県の管区に分かれていたものの、最大の大通り定鼎門街が県境とはなっていなかった点である。河南・洛陽二県の境界については史料には明示されておらず、洛水が境界であったとする説（愛宕 1981: 45）、愛宕説を否定し、両県についての史料を精査した上で、隋代～唐代前期には長夏門街に境界があったとする説（辛 1993: 147）がある。管見では、前者が保留付で県庁の位置から洛水を境界としているのに対し、後者が墓碑銘等の実証的検討に依っている分、信憑性が高いと思われる。前者が正しければそもそも洛陽に「左右京」に相当する概念はなかったことになるし、後者が正しければ朱雀大路に相当する定鼎門街と「左右京」の境界線たる長夏門街が別個に存在したことになる。そもそも『元河南志』において条坊の位置を示す際も「定鼎門東第三街」「長夏門之東第一街」などと表されることから、定鼎門街を境に都城が東西に二分されていたとする意識はあまり感じられない。

恭仁京でも大極殿が左京に造営されたことについて伝統的な北闕型の都城形態から逸脱した変則的都城であるという評価がなされている。この理由については明確な説明は誰にもできていないとされている（岩井 2012: 50）。その上で岩井（2012）は泉津と恭仁京が重複立地していることについて触れ、泉津側は洪水の危険性が高く内裏造営に向かず、十分な市域を確保するために甕原・加茂盆地へ市域が拡張された（岩井 2012: 50）としている。

その結果内裏が立地した甕原の地については『相楽郡誌』に「地形中央は平坦なる高野にして東西南の三面漸次低下し、西北の一部丘陵に接したるは亀に似たり。甕はまたかめと訓む」（京都府教育會相楽郡都會 1920: 358）と記され、甕原北岸が小高い地形になっており、洪水の危険性が低いことから、内裏設置に適していたことが分かる。

宮城朱雀門より南に直通する大路は朱雀大路に比定されている（岩井 2012: 61）。実際内裏跡

の南には朱雀の小巷や大門址の遺構が存在する（京都府教育會相樂郡部會 1920: 371-2）。しかし左右京を分けたのはこの朱雀大路ではなく、「從賀世山西道以東為左京。以西為右京」（続日本紀 741-9-12）とあるように賀世山西道であった。平城京や平安京等の日本の一般的都城と違い、恭仁京では朱雀大路は左右京境界線と一致していなかったのである。

このように隋唐洛陽城と恭仁京で内裏が北闕型ではなく、各々北西と北東に偏在し、左右京の境界線が朱雀大路と一致しない。これに初めて気付いたのは喜田貞吉であった（喜田 1939: 305, 313）。しかし彼は「恭仁京はその制を唐の洛陽に倣いたれば」（喜田 1939: 313）と述べ、恭仁京を日本都城の例外として位置付けるのみで、「唐の洛陽」と恭仁京がどうしてこのような特殊な形態をとるに至ったかまでは踏み込まなかった。

この点について考察を加えるにあたっては、4. 1) で検討したように「河漢之象」たる両大河が「貫都」していたことに留意する必要がある。両都とも銀河を象徴する大河が都を貫いていた以上、洪水の危険は避けられなかった。それ故両都とも北極星を取り巻く「帝居」たる宮城は北岸の高台を選んで造った。宮城の位置については洛陽が北西、恭仁京が北東と一致しないが、これも両都を貫く大河の流路に照らせば、双方の上流の北岸に相当する。4. 1) で論じたように両都の大河に架けられた橋の性格も両大河の流路に照らして上流から下流に並べるとその性格が一致している。

このように、隋唐洛陽城と恭仁京の性格が大河の流路に一致し、東西が逆になっている理由については恐らく中原では西高東低の地形故に川が基本的に東流していたのに対し、日本の畿内では東高西低の地形故に川が基本的に西流していたことに求め得るものと思われる。

古代中国でも中原の地形が西高東低に傾いていたことは古来意識されており、北西の乾は「天徳」とされ、山に通じるものとされている¹⁷⁾。これに対し、日本の畿内¹⁸⁾においては淀川水系、大和川水系、吉野川・紀ノ川水系のいずれも東の分水嶺を水源とし、西の大阪湾へ注いでいる。聖武天皇や吉備真備を中心とする恭仁京遷都時の首班たちは唐において北西为天徳とされ、洛陽城の宮城が置かれた理由を理解した上で、それに対抗し、東高西低の日本・畿内の地勢に合わせ、内裏の設置位置を北岸東側に定めたのではあるまいか。

朱雀大路と左右京の境界線についても、隋唐洛陽城と恭仁京のいずれでも一致していない。洛陽城では定鼎門街が朱雀大路に相当し、辛徳勇に依れば長夏門街が河南・洛陽二県の境界であった（辛 1993:147）。恭仁京では朱雀大路は左京の内裏から真っ直ぐ南に直通し、賀世山西道が左右京を分けていた。恭仁京において朱雀大路と左右京の境界線が一致していないことは、日本の都城の一般的形態の例外とされている（喜田 1939: 313）が、これも洛陽城における定鼎門街と長夏門街の関係と一致していることから、洛陽城のプランに倣ったものとみれば説明がつく。

4) 狭隘な甕原の選地

洛陽城を取り巻く地勢は「北據邙山，南對伊闕，洛水貫都，有河漢之象」（旧唐書 38:1420-1）と北に邙山，南に伊闕の山々を控えるも，市域は一つにまとまっていた。それに対し，恭仁京は左右京に賀世山などの山地が介在している（足利 1973: 43）。最後の問題点は，何故恭仁京が都城の縄張りも十分確保できず，左右京が賀世山で分断されるような狭隘な木津・甕原の地を選んで建てられたかという選地の問題である。

ここで改めて表 1 に注目したい。724 年に即位して以来 740 年の東国行幸までの聖武天皇の行幸には二つのピークがある。まずは即位直後の 724 ～ 7 年。726 年に藤原宇合の許難波宮を造営したのを中心として，難波經由で西・南方面に向かっていることが分かる。その後 728 ～ 33 年，聖武天皇は平城京から動いていない。次なる行幸のピークは 734 年に始まる。この時の主な行幸先は甕原離宮，難波宮，吉野離宮である。第 2 期の行幸ピークの直前の 733 年 4 月 3 日，遣唐使が難波津から出発し，約二年後の 735 年 3 月 10 日に大使広成が平城京に戻っている。

第 2 期の行幸先については，吉野離宮の位置づけが難しいが，甕原離宮が後の恭仁京の近郊，難波宮が後の難波京と各々後の遷都に関わっている。殊に甕原離宮への行幸が 736 年に一回，739 年に二回といずれも遣唐使帰還後であることは改めて注目に値する。第 2 の行幸のピークが遣唐使派遣直後に始まり，目的地に後の遷都先近くが多いことから，聖武天皇は遣唐使の大使広成に唐の都城についての情報も集めて帰るよう命じ，自らも遷都先候補地を視察して回っていた可能性が高い。真備が鉄尺を持ち帰ったのも天皇の命を受けた広成に依頼されたからであろう。

そもそも遷都と言っても天皇が気に入った土地をいきなり都にすることはできない。『続日本紀』を参照し，試みに平城京，難波京，紫香楽京遷都の事例を簡潔に見てみよう。

平城京については初めて「議遷都事也」（続日本紀 707-2-19）されたのが 707 年。708 年には「巡幸平城。觀其地形」（続日本紀 708-9-20）し，9 月 30 日に平城小司長官を決定，10 月に「以造営平城宮之状也」（続日本紀 708-10-2），12 月に鎮祭を行っている。709 年には 8 月，12 月に平城宮に行幸し，710 年 3 月 10 日に「始遷都于平城」（続日本紀 710-3-10）した。

難波京については，726 年 10 月 26 日に難波宮が藤原宇合の許で再建されて以来，聖武天皇はしばしばここに行幸している。そして恭仁京遷都後の 744 年には「喚会百官於朝堂。問曰。恭仁・難波二京，何定為都」（続日本紀 744-1-1）と遷都を臣下に諮り，同年 2 月 26 日「今以難波宮定為皇都」（続日本紀 744-2-26）と難波京へ遷都している。

紫香楽京については，紫香楽への道が初めて造られたのは 742 年である。「始開恭仁京東北道。通近江国甲賀郡」（続日本紀 742-2-5）とされている。同年 8 月 11 日に紫香楽離宮の離宮司を任命し，27 日に初めて行幸している。その後聖武天皇は恭仁京に都がある間に三度この地に行幸し，難波遷都後の 745 年 1 月 1 日紫香楽へ遷都を断行している。

いずれも遷都に至るまでに，①離宮造営，②行幸という段階を踏んでいる。聖武天皇の行幸

第2期の目的地の甕原、難波、吉野の各離宮についてはすでに①離宮造営の段階は解決されており、その後の間もなく恭仁、難波へ遷都が行われていることから、天皇は将来の遷都を見据えて視察に赴いていたものと思われる。

これら三つの離宮に共通するのは甕原離宮に木津川、難波宮に淀川、吉野離宮に吉野川と川を用いた水運が絡むことである。聖武天皇は当初より水運を取り込んだ都への遷都を考えていたのだろう。そんな中で帰国した真備等の遣唐使から聞く唐の都城特に洛陽の話は天皇の注意を引くのに十分だったのであろう。

これらの三離宮の中では、難波宮はかつて都が置かれ、難波津も近いことから水運にも問題はなかったが、大河で貫かれておらず、「河漢の象」がないことが不満（瀧川 1967: 95）で、吉野離宮は川谷が全体的に狭く、特に北岸が条理や内裏を設定するには狭隘に過ぎたのが不満だったと思われる。しかし甕原離宮周辺は、瀧川が洛陽との類似を指摘している（瀧川 1967: 337）ように、北に狛山、南に賀世山を控え、中央を木津川が流れ、近くには大和への水運を一手に引き受ける泉津があるという地勢である。「北據邛山，南對伊闕，洛水貫都，有河漢之象」（旧唐書 38: 1420-1）とされ、唐随一の水運拠点たる新潭を擁する洛陽の地を彷彿とさせたのであろう。甕原離宮は聖武天皇がしばしば足を運びその地に親しんでおり、かつ有力な水運拠点を近くに控える地の中で最も洛陽に類似していたため選ばれたと言えよう。

5 結論

以上本稿では恭仁京が唐代の洛陽城の影響を強く受けて造営された可能性について、その歴史背景、都城を貫く大河、水運や宮城などの都市機能、都城自体の立地などの観点から、実際に双方の史料と既存の知見を元に比較を行ってきた。

この観点に基づくと、恭仁京では（1）都を貫く大河、（2）内在する港、（3）偏在する内裏と「朱雀大路」、（4）狭隘な甕原の選地、など他の都城に見られない独特な特徴（岩井 2012:48-50, 56）があったが、（1）は洛陽を支配した「河漢の象」たる大河の存在、（2）は中国全土からの物資を一手に引き受ける新潭の港の存在、（3）は上流北岸にある宮城から「朱雀大路」が南進し、左右京を分かち通りが別にあった点、（4）は「北據邛山，南對伊闕，洛水貫都，有河漢之象」（旧唐書 38: 1420-1）という洛陽周辺の地勢、に各々その起源を求め得ることが明らかになった。

遣唐使より帰国した真備等を重用し、このような都に遷都した聖武天皇の挙動には、唐全盛の時代にあって、先進国唐からの強い影響と唐に対する聖武天皇の対抗心も仄見える。恭仁京に関しては都の置かれた期間の短さゆえに史料が不足しており、本論で扱った中での恭仁京における天漢崇拝、中原の西高東低と畿内の東高西低の対比等についての文証を欠いたが、今後の文献史料・考古学両面の研究で当時の陰陽道や聖武朝下の外交思想について明かされ、本論で出された上述の仮説について実証されることを期待したい。

註

- 1) 「是時。遣於唐国学生，倭漢直福因。奈羅訖語惠明。高向漢人玄理。新漢人大国。学問僧，新漢人日文。南淵漢人請安。志賀漢人惠隱。新漢人広齊等，并八人也。」（日本書紀 608-9-11）
- 2) 「大唐学問僧清安。学生高向漢人玄理，伝新羅而至之。」（日本書紀 640-10-11）
- 3) 「以守民部尚書直大弐栗田朝臣真人。為遣唐執節使」（続日本紀 701-1-23）
- 4) 「栗田朝臣真人等拜朝」（続日本紀 704-10-9）
- 5) 「以從四位下多治比真人県守為遣唐押使。從五位上阿倍朝臣安麻呂為大使。正六位下藤原朝臣馬養為副使。大判官一人。少判官二人。大録事二人。少録事二人。」（続日本紀 716-8-20）
- 6) 「皇帝在前幸恭仁宮。始作京都矣。」（続日本紀 740-12-15）。
- 7) 「当皇城端門之南。渡天津橋。至定鼎門。南北大街。唐曰定鼎街」（元河南志 1.3a）。
- 8) 「南校曰星津橋。中校曰天津橋。北校曰黃道橋」（元河南志 4.15b）
- 9) 「定鼎門街第三街。唐時北当洛水之中橋…其橋隋大業初造。名立德橋。…今廢」（元河南志 1.5a）。「斗門之西旧中橋。隋名立德橋。北当徽安門。因水溢坏壞」（元河南志 4.15b）
- 10) 「過斗門。又東流經新中橋。南当長夏門。北通西漕橋。南北三百步。武德初置浮橋。尋廢韋機乃徙中橋于。此後漕水復壞。永昌中敕將作監少匠劉仁景修繕。李昭德統其事。殊為堅壯。号永昌橋。尋廢其名」（元河南志 4.15b）。「定鼎門街東之第五街也。南出長夏門。唐時此当洛水之中橋。乃韋機所徙者。按唐李昭德傳。初都城洛水天津之東立德坊。西南隅有中橋及利涉橋。上元中司農卿書机始移中橋。置于安業坊之五街。当長夏門。都人甚以為便。因廢利涉橋。所省万計。然歲為洛水冲注。常勞治葺昭德创意。積石為脚銳。其前以分水勢。自是竟无漂損。唐末其橋亦廢」（元河南志 1.7b）
- 11) 「又東經安業・慈惠二坊之北有浮橋。隋造。名利涉橋。北抵通遠市南壁之西偏門。王世充平門市俱廢顯慶中。復置。南当南市之北壁東偏門。北当北郭之安喜門。干封中又廢后乃私造。以舟為梁」（元河南志 4.15b）。
- 12) 「王 命恐 雖見不飽 栖山越而 真木積 泉河乃 速瀨 竿刺渡 千速振 氏渡乃 多企都瀨乎 見乍渡而 近江道乃 相坂山丹 手向為 吾越往者 樂浪乃 志我能韓琦 幸有者 又反見 道前 八十阿每 嗟乍 吾過往者 弥遠丹 里離來奴 弥高二 山文越來奴 劍刀 鞘從拔出而 伊香胡山 如何吾將為 往邊不知而」（万葉集 13.3240）及び「泉川 渡瀨深見 吾世古我 旅行衣 蒙沾鴨」（万葉集 13.3315）
- 13) 「山背乃 久邇能美夜古波 春佐礼播 花咲乎々理 秋佐礼婆 黄葉尔保比 於婆勢流 泉河乃 可美都瀨尔 宇知橋和多之 余登瀨尔波 宇积橋和多之 安里我欲比 都加倍麻都良武 万代麻弓尔」（万葉集 17.3907）
- 14) 「宮城在都之北西隅」（旧唐書 38:1421）
- 15) 唐の韋述の逸文「隋帝煬帝登北邙。觀伊闕曰。此龍門耶。自古何為不建於此」（通鑑地理通釈 4.18a）
- 16) 「当皇城端門之南。渡天津橋。至定鼎門。南北大街。唐曰定鼎街」（元河南志 1.3a）
- 17) 古代中国では、この理由については「昔者共工與顓頊爭為帝，怒而觸不周之山。天柱折，地維絶。天傾西北，故日月星辰移焉。地不滿東南，故水潦塵埃歸焉。」（淮南子 3.2）という伝説で以て説明されていた。
- 18) 畿内は当初「凡畿内東自名壑横河以来。南自紀伊兄山以来。〈兄。此云制。〉西自赤石櫛淵以来。北自近江狹々波合坂山以来。為畿内国」（日本書紀 646-1-1）と定義されていた。

参考文献

一次史料

平岡武夫（編）1977. 『唐代の長安と洛陽』京都大學人文科學研究所.

隋書：魏徵，令狐德棻 1973. 『隋書』中華書局.

舊唐書：劉昫 1975. 『舊唐書』中華書局.

新唐書：歐陽修，宋祁 1975. 『新唐書』中華書局.

日本書紀：佐伯有義（編）1928.『日本書紀』上，下．朝日新聞社．
続日本紀：佐伯有義（編）1929.『続日本紀』上，下．朝日新聞社．
萬葉集：澤瀉久孝，佐伯梅友 1949.『新校萬葉集』創元社．
淮南子：楠山春樹（編）1979.『淮南子』上，中，下 明治書院．
行基年譜：新川登亀男 1999.『社会的結合としての行基集団に関する基礎的研究』平成 8~9 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書．

二次資料

足利健亮 1969.「恭仁京の歴史地理学的研究第一報 -- 現景観の観察，測定にもとづく朝堂院・内裏・宮域および右京「作り道」考」史林 52, 3, 92-122 頁．
——1970.「恭仁京の京極および和泉・近江の古道に関する若干の覚え書き」社会科学論集 1, 33-60 頁．
——1973.「恭仁京城の復原」社会科学論集 4・5, 31-46 頁．
——1980.「恭仁京」地理 25, 9, 74-75 頁．
——1985.『日本古代地理研究』大明堂．
愛宕元 1981.「唐代兩京郷里村考」東洋史研究 40, 3, 438-479 頁
伊野近富 2011a.「恭仁京造営史（上）」京都府埋蔵文化財情報 115, 11-16 頁．
——2011b.「恭仁京造営史（下）」京都府埋蔵文化財情報 116, 15-22 頁．
岩井照芳 2010.「泉津と古代都城 -- 上ツ道・中ツ道・下ツ道の北の起点」古代文化 62, 2, 169-186 頁．
——2012.「恭仁京の復元：泉津の下津道を起点とした都市計画」古代文化 64, 1, 42-65 頁．
王勇 1998.『唐から見た遣唐使：混血児たちの大唐帝国』講談社（講談社選書メチエ）．
応地利明 2011.『都城の系譜』京都大学学術出版会．
大谷光男 2003.『旧暦で読み解く日本の習わし』青春出版社．
岡崎敬 1963.「隋・大興＝唐・長安城と隋唐東都洛陽城—近年の調査結果を中心として—」仏教芸術 51, 86 - 108 頁．
小笠原好彦 2010.「恭仁宮・紫香楽宮・難波宮」（佐藤信・田辺征夫（編）『古代の都 2—平城京の時代』吉川弘文館）216-237 頁．
——2011.「聖武天皇による恭仁京造営と隋唐洛陽城」（石川日出志・日向一雅・吉村武彦（編）『交響する古代—東アジアの中の日本—』東京堂出版）157-177 頁．
小方登 2000.「衛星写真を利用した渤海都城プランの研究」人文地理 52, 2, 129-148 頁．
——2010.「文学・史料と衛星画像から読み解く都市（特集 都市論）」人環フォーラム 26, 22-25 頁．
鎌田元一 2008.『律令国家史の研究』塙書房．
加茂町史編纂委員会 1988.『加茂町史』第 1 巻 京都府相楽郡加茂町
喜田貞吉 1939.『帝都』日本學術普及會．
木津町史編纂委員会 1991.『木津町史』本文篇 木津町．
京都府教育會相樂郡部會 1920.『相樂郡誌』京都府教育會相樂郡部會．
塩沢裕仁 2010.『千年帝都洛陽：その遺跡と人文・自然環境』雄山閣．
宿白 1990.「唐代城址類型初探」（北京大学考古系（編）『紀念北京大学考古專業三十周年論文集 1952-1982』文物出版社）
辛德勇 1993.『隋唐兩京叢考』三秦出版社．
徐松，愛宕元（訳註）1994.『唐兩京城坊攷：長安と洛陽』平凡社．
妹尾達彦 1997.「隋唐洛陽城の官人居住地」東洋文化研究所紀要 133, 67-111 頁．

- 2001.『長安の都市計画』講談社（講談社選書メチエ）.
- 瀧川政次郎 1967.『京制並に都城制の研究』角川書店.
- 瀧浪貞子 1991.『日本古代宮廷社会の研究』思文閣出版.
- 館野和己 2009.『古代都城のかたち』同成社.
- 沈福偉 1985.『中西文化交流史』上海人民出版社.
- 積山洋 2001.「中国古代都城の外郭城と里坊の制」歴史研究 48, 1-28 頁.
- 程存潔 1993.「唐代東都洛陽城市研究概況」中国史研究動態, 11-15 頁.
- 中島正 2007.「恭仁京と京の実態」（吉村武彦・山路直充『都城』）257 頁
- 中谷雅治 1987.「甕原離宮の位置について」（『京都府埋蔵文化財論集』第 1 集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）
- 中村太一 1996.「藤原京と『周礼』王城プラン」日本歴史 582, 91-100 頁.
- 橋本義則 2011.『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会.
- 森本公誠 2010.『聖武天皇 責めはわれ一人にあり』講談社.

